Osaka University Knowledge Archive

Title	懐徳堂学派の学問観
Author(s)	佐藤, 由隆
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72425
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　佐藤　由隆　　）	
論文題名	懐徳堂学派の学問観

論文内容の要旨

本論文は江戸期の大坂において隆盛を誇った懐徳堂学派の学問観について、懐徳堂初中期を代表する五井蘭洲、およびその門人であり懐徳堂の最盛期を築いた中井竹山・履軒兄弟の三人を主な対象として考察を行ったものである。より具体的に言えば、彼ら懐徳堂学派が掲げた理念として、先行研究でもすでに指摘のあるものの、彼らの具体的思想とはあまり関連付けて論じられていない「博約並進」および「知行並進」に注目し、その思想史的意義および懐徳堂学派内における思想的展開の実態を解明することを主たる目的としている。また、それと同時に、「知行並進」という理念を軸とした、日本思想史、ひいては中国思想史の再検討を行うための基礎的研究ということも、併せて視野に入れている。

本論文は五章構成であるが、その概略は以下の通りである。

まず第一章「懐徳堂学派の知行論」では、懐徳堂内部の「博約並進」「知行並進」の実態を整理することを試みた。そこでまず「博約並進」という理念を唱えた者の中で最も遡れる人物として、五井蘭洲の「博約並進」論に注目することから始めたが、その結果、これが知識の取得・分析（「知」）と実践・検証（「行」）を交互に繰り返していくことを意味するものであり、陽明学の「知行合一」を批判しながらも、同時に朱子学の「先知後行」についても懐疑的であったことを明らかにした。またその過程で、蘭洲が陽明学の「合一」を批判して「並進」を主張する中で、懐徳堂初代学主である三宅石庵の学術態度を一つの理想型として評価していることも確認した。その後、そうした「知行並進」論に基づいて形成されたのが、西洋のプラグマティズムに通ずるとも指摘されている、中井履軒の「格物致知」解釈であり、これは蘭洲の「格物致知」解釈とも共通していることを明らかにした。また懐徳堂の規約である『懐徳堂定約』に、学問の意義に懐疑的な当時の世相に対し、その意義を宣伝していかなくてはならない、という文が見られることから、懐徳堂学派がこうした「並進」思想を選択し、自己と学問対象との緊迫性を重視する思想を展開していった原因として、そうした社会背景が存在するのではないか、ということも述べた。

第二章「知行並進論の系譜」では、前章で確認した「知」と「行」の「並進」という彼らの発想の由来を辿るために朱熹以来の宋学・明学における知行論を整理し、「知行並進」論の思想史的な系譜を儒学思想史全体の中に求めることを試みた。その結果、この「知行並進」という理念自体は、朱子学の初発の頃から「先知後行」とともに内在していたものであり、明代に入り、「先知後行」への拘泥を警戒して「知行並進」を優先的に選択したり、あるいは「知」と「行」の先後関係に拘泥しないような思想が朱子学内部にも存在していたことを明らかにした。つまりそうした明儒の思想を経て、行為主体にとっての現実性・有用性を重視する学術思想を形成した朱子学の一派こそが懐徳堂学派であった、ということが明らかとなった。これにより、先行研究では中村惕斎の「知行兼進」からの影響のみ指摘されていた彼らの知行論を、朱子学全体の中に位置づけることが可能となったのである。またこうした考察を通して、「知行並進」という視座から日本儒学史を再検討できる可能性があることも同時に示した。

ここまでは本論文の主要テーマである「博約並進」「知行並進」という理念自体の考察であったが、これ以降の章

では、より個別具体的な理念・概念について、上の「並進」思想がいかに反映されているか、ということを考察していった。

第三章「五井蘭洲と中井履軒の格物致知論」では、これまでの流れを受け、第一章でも確認した、五井蘭洲と中井履軒の「格物致知」解釈について、近年注目された五井蘭洲の自筆資料を中心資料として取り上げながら、両者の解釈の差異を「知行並進」論の発展的継承という観点から説明することを試みた。すなわち、五井蘭洲と中井履軒の「格物致知」解釈の差異も、「知行並進」に基づき、右に述べた行為主体にとっての現実性・有用性を重視する方向へと発展させていった結果であると説明することができることを明らかにした。このような方向に行くことは、「先知後行」からさらに遠ざかることとなり、実践による検証が重視されることになるので、「先知後行」を重視する朱子学派から見れば、それは実践重視の陽明学派のようにも映じたことであろうことも充分推測できる。このように論ずることで、同時代の朱子学者が中井竹山・履軒兄弟を指して「陽明学ナリ」と言ったことを根拠にして彼らを陽明学派であると認定した先行研究に対しての反論も試みた。

第四章「中井竹山の文章論」では、中井竹山が文章技術の習得、および文章による実践をどのようなものとして捉えていたかということについて、これまであまり関連付けられることのなかった「博約並進」とのつながりの中で考察することを試みた。その結果、竹山は「博文約礼（博約）」に含まれる、文章法の学習とそれによる社会実践に、「我意ヲ達スル」という大きな価値を見出し、懐徳堂の学問および教育のスローガンとして掲げていたことが判明した。懐徳堂最後の教授である並河寒泉や、明治以降に懐徳堂の復興運動に携わった中井木菟麻呂は、「博文約礼」を実践したことが懐徳堂の大きな特色であると述べ、木菟麻呂は「博文約礼之訓」を踏襲しなければ懐徳堂の復興はあり得ない、とまで言うが、こうした「博文約礼」の具体的な内容として、竹山が提唱した文章教育および文章による社会実践という要素が強く含まれていたと考えられる。また寒泉は、崎門学派を「約礼」に偏重し、文章学習を軽視しているとして批判しているが、竹山も同様の論を述べて崎門学派を強く批判していることが判明し、両者間の思想的継承性も明らかとなった。

第五章「懐徳堂学派の「敬」論」では、五井蘭洲や中井竹山が「敬」という概念について、「知」と「行」の関係性の中でいかに認識していたか、ということについて考察した。またその解釈が他学派と比較してどのような特徴があるのかということについて、同じく日本の朱子学派であり、「敬義内外」に代表されるように「敬」を重視したことで知られる崎門学派との比較を中心にして検討した。結果、五井蘭洲や中井竹山の「敬」についての理解が、従来の「窮理」と対置されるような「居敬」ではなく、「窮理」を包含しながらもあらゆる行為における自己の心的状態を指したものであることを明らかにした。またその理解自体は崎門学派の特色として知られる「敬義内外」説と一致している一方で、「敬」そのものの解釈については崎門学派を批判し、彼らの支持するものとは別の「敬」の側面を強調していることも確認した。これによって、儒学史における「敬」論の受容と展開についての可能性を提示し、日本朱子学の特色を再検討する必要がある可能性があることも併せて提起した。

以上のような考察によって、従来から指摘されている懐徳堂学派の実証的合理主義、あるいは実用主義的性格、平たく言えば「現実を生きるための学問」という考え方は、この「博約並進」「知行並進」という理念によって説明可能であり、それはまた朱子学派としての懐徳堂学派の特色を説明するための大きな要素であることを明らかにした。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（佐藤由隆　　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	湯浅　邦弘
	副 査	大阪大学　教授	浅見　洋二
	副 査	大阪大学　教授	宇野田　尚哉

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　懐徳堂学派の学問観

学位申請者　佐藤由隆

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　湯浅邦弘

副査　大阪大学教授　浅見洋二

副査　大阪大学教授　宇野田尚哉

【論文内容の要旨】

本論文は、江戸時代の大坂学問所「懐徳堂」の学問的特質を追究しようとしたものである。従来の研究では、懐徳堂は江戸期の大坂において、無鬼論に代表されるような実学的合理主義をとり、大坂商人を中心とした民衆に対し、近代化を受容するための思想的基盤を提供したと評価されてきた。これに対して本論文では、懐徳堂学派の人々が、そうした主張を展開するに至った、その究極的理念を追究しようとする。

その手がかりとして、初期懐徳堂の基礎を固めた五井蘭洲の「博約並進」の思想に注目する。これはすでに、懐徳堂の重要な先行研究である陶徳民『懐徳堂朱子学の研究』（大阪大学出版会、1994年）にも言及があるが、本論文ではさらに、懐徳堂学派の「並進」の理念を中国宋代・明代にさかのぼって追究し、中国朱子学との継承性を明らかにしようとする。また、その上で、その理念が具体的にどのような実践活動を生み出していったかについて考察しようとする。

全体は、「序論」に続き、第一章「懐徳堂学派の知行論」、第二章「知行並進論の系譜」、第三章「五井蘭洲と中井履軒の格物致知論」、第四章「中井竹山の文章論」、第五章「懐徳堂学派の「敬」論」の五章からなり、全体の分量は、400字詰原稿用紙に換算して、約260枚である。

まず第一章では、懐徳堂学派において「博約並進」の理念を最初に唱えた人物として五井蘭洲に注目し、それが、知識の取得・分析（知）と実践・検証（行）を交互に繰り返していくという意味であり、陽明学の「知行合一」を批判しつつ、同時に朱子学の「先知後行」についても懐疑的であったことを明らかにする。

第二章では、知行並進論の系譜を追究し、「知行並進」という理念自体は、朱子学の初めの頃から「先知後行」とともに内在していたものであり、明代に入って、「先知後行」への拘泥を警戒して、「知行並進」を優先的に選択し、あるいは両者の先後関係を特定しない思想が朱子学内部にも存在し、そうした明代儒者の思想を経て、現実性・有用性を重視する学術思想を形成した朱子学の一派こそ、懐徳堂学派であったと指摘する。

第三章では、五井蘭洲と中井履軒の「格物致知」解釈を取り上げ、その差異も、「知行並進」に基づいて現実性・有用性を重視する方向へと発展させていった結果だとし、それが、「先知後行」を重視する朱子学派から懐徳堂学派が実践重視の陽明学のようにも見えた要因であると推測する。

第四章は、この「博約並進」に基づいた具体的実践の方向性について、中井竹山の文章論を取り上げる。竹山

は、「博文約礼」に含まれる文章法の学習とそれによる社会実践に大きな価値を見いだし、懐徳堂の学問および教育のスローガンとして掲げていたことを指摘する。

第五章は、五井蘭洲や中井竹山の「敬」が、「知」と「行」の関係性の中でいかに認識されていたかについて考察する。またその認識に、崎門学派に対する批判が込められていたことも指摘する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、申請者が卒業論文、修士論文以降、一貫して追究してきた懐徳堂の学問的特質に関する論考で、『日本中国学会報』『東アジア文化交渉研究』『懐徳堂研究』などの学会誌に掲載された三本の論文を基に、さらに書き下ろしを加えて再編したものである。

その特長をまとめれば、次のように言えるであろう。

第一は、研究の視点・着眼である。これまでの懐徳堂研究でも、その学術的基盤として朱子学に注目するものはあったが、その「学問観」に特化して深く追究しようとした研究はなかった。しかも、その淵源を中国宋代・明代の朱子学に遡って検討している。もちろん、陶徳民『懐徳堂朱子学の研究』という大作がすでに存在するが、申請者は、この先行研究を充分に踏まえながら、それを発展深化させようとした。明確な目的と視点を持ち、研究の手順をしっかりと踏んでいると評価できる。

第二は、新資料の活用である。初期懐徳堂の基礎を固めた五井蘭洲については、その主著として『非物篇』があるが、本論では、他に『質疑篇』を取り上げている。しかも、この『質疑篇』はこれまで蘭洲自筆本は散逸したと考えられてきたが、近年の研究成果を踏まえて、その自筆本と推測される大阪府立中之島図書館蔵本を新たに検証して活用している。また、主著『非物篇』は荻生徂徠を批判する書であるが、もう一つ、これまで活用されてこなかった『非伊篇』を伊藤仁斎批判の書として取り上げている。こうした新資料の精確な読み込みが、本論文に新鮮さと重厚さを加えていると評価できる。

第三は、周辺への目配り、視野の広さである。これまで、懐徳堂の学問的特質は、主として「反徂徠」と捉えられてきた。朱子学擁護の立場から、古文辞学派を痛烈に批判するのが懐徳堂学派という理解である。そして、荻生徂徠を批判するものとして、五井蘭洲『非物篇』、中井竹山『非徴』があることはよく知られている。しかし本論文では、さらに山崎闇斎の崎門学派にも注目し、また伊藤仁斎についても『非伊篇』を活用することにより、総合的な検討を加えている。すなわち、懐徳堂学派の内部にのみ注目するのではなく、その周辺の崎門学派（山崎闇斎）、古学派（伊藤仁斎）、蘐園学派（荻生徂徠）などとの関係にも充分留意しているのである。懐徳堂の学問的特質を相対的に評価する手法として高く評価できる。

ただ、本論文では、中国宋明代における「知行」論の展開についての踏み込みが今ひとつ弱いこと、五井蘭洲の「知行並進」論が形成される社会的な背景についての考察がやや不足していること、中井竹山・履軒時代の学問状況の把握がやや不十分であることなど、今後の課題とすべき点は多い。さらに、「知行並進」「格物致知」いずれについても、具体的に検討した懐徳堂学者は五井蘭洲と中井履軒だけである点も、それをもって直ちに「懐徳堂学派」全体の特質と断定して良いのかやや不安が残る。

とは言え、本論文は、中国宋代・明代から江戸時代までを視野に入れ、懐徳堂の学問的特質を丹念に追究した重要な研究成果である。全体を通じて、テキストに即した着実な考察が加えられている点は高く評価できる。また、懐徳堂の基礎を固めた五井蘭洲へ注目した点や、これまでほとんど使われてこなかった新資料を精読して活用した点も評価でき、今後の研究のさらなる進展が期待される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。